

「神田家の男運と愛
のあれこれ」

村
田

浩
子

【あらすじ】

神田家の女性陣は、3代揃って男運が無い。葛谷亜子（28）は、夫・葛谷啓一郎（35）の浮気が原因で別居することになり、10年ぶりに実家に戻ってくる。母親の神田美子（53）は亜子が7歳の時に「金食い虫」だった夫を追い出し、祖母の神田希子（78）は痴呆症になった今も、浮気性の夫（故人）のことになると刃物を持ち出す始末だ。

亜子は好きだった父親を追い出した美子のこと許せず、長年、関係を断っていた。帰省後、亜子は美子が経営するスナックの手伝いを始めるが、ズケズケと歯に衣着せぬ発言をするお節介な美子のことを疎ましく思っている。美子は亜子のことを大切に思っているが、素直ではない性格が災いし、顔を合わせれば口喧嘩の毎日が続いていた。二人の関係性是一向に改善されないまま、時だけが過ぎていく。

そんな折、別居中の啓一郎が亜子を訪ねて

くる。啓一郎に未練がある亜子は復縁を期待するが、渡されたのは離婚届だった。そこに現れた美子が啓一郎に啖呵を切るが、失望のどん底にいる亜子は美子のデリカシーの無い言動に腹を立て、「出てったのがお父さんじゃなくてお母さんだったら良かったのに」と言っ

て走り去る。

傷心の亜子は、自分に好意を寄せている服部創太（２８）の元へ行き、関係を持つ。事後の亜子のもとに希子がいなくなつたと連絡が入る。亜子と美子は希子を探しまわるが、見つからない。亜子は、希子が心配で泣きじやくる美子をなだめ、再び搜索に出ようとする。と、家の中から希子の読経が聞こえてくる。無事希子が見つかり、安堵した亜子と美子は、これまでの言動を謝罪し、互いを許し合う。男に頼らずに生きていくことを決めた亜子は服部にまだ付き合えないと告げ、大切な家族過ごす日常生活に戻っていく。

【人物関係表】

葛谷 亜子（28）（6） 無職

神田 美子（53）（31） 亜子の母親

神田 希子（78） 亜子の祖母

服部 創太（28） 亜子の学生時代の同級生

中島 敏江（58） スナック美子のホステス

松崎 宏（58） スナック美子の常連客

葛谷 啓一郎（35） 亜子の夫

神田 恭平（38） 亜子の父親

ヘルパーの女性

○東京駅・新幹線改札前

行き交う大勢の人々。

派手な服にサングラス姿の葛谷亜子

（２８）、電光時刻表を見上げている。

足元の大きなトランクケースのハンド

ルを手に取り、ヒールの音を響かせな

がら改札へ颯爽と入っていく。

○走る新幹線内

亜子、ビール缶を開ける。

車両がトンネルに入り、暗転。

○走る在来線の電車内

縦座席に座る亜子、ビールをごくごく

と飲んでいる。

車両がトンネルに入り、暗転。

○走るローカル線の電車内

古いベロア調の縦座席の車両。

亜子と数人の客がぽつぽつと座っている。

車両がトンネルに入り、暗転。

× × ×

乗客は亜子一人だけになっている。

亜子、寝ている。

サングラスがずり落ちている。

○無人駅（夕）

田舎の小さな無人駅。

亜子、駅舎から出てくる。

入口にあるゴミ箱に持っているビール缶を捨てる。

手持ちカバンの中を探り、縦横15センチメートルほどの正方形の箱を取り出す。

箱は表面がビニールで、中に白いバラのプリザーブドフラワーが詰まっている。バラの花弁は黄ばんでいる。

亜子、箱をゴミ箱に捨てようとするが、

手を止め、箱をじっと見つめる。
箱をカバンに戻し、歩き始める。

○道路（夕）

田んぼ道を歩いてくる亜子。

「神田」と書かれた表札がかかる古い

一軒家の前で止まる。

亜子「（ぽつりと）結局行きつくところはここ
なのね」

玄関扉が開き、中から包丁を持った神

田希子（78）が早足で出てくる。

亜子「おばあちゃん？」

希子、亜子を見て、

希子「亜子ちゃんかあ。おかえりんさい」

亜子「え、なんで包丁？」

希子「お父ちゃんやお父ちゃん。あんの浮気

亭主、また服部のお美津んとこしけこんど

るんや」

亜子「お父ちゃんって、おじいちゃんのこ

と？」

希子「お父ちゃん言うたら一人しかおらんやろ。変なこと聞くなあ、亜子ちゃんは」

希子、道をずんずんと歩いていく。

亜子「え、えっ。待って待っておばあちゃん。

そんな物騒なもの持ってたら危ないって」

玄関の扉が開き、神田美子（53）が

出てくる。

すれ違いざまに亜子に向かって、

美子「なんやのアンタ、大仰な恰好やなあ。

汚れるからはよ脱ぎ」

美子、希子に早足で追いつき、

美子「お母ちゃん、夕飯できたで」

希子、ぴたっとその場で止まると、

希子「そうかあ。ご馳走になるかなあ」

希子、美子に連れられておぼつかない

足取りで戻ってくる。

希子、亜子に向かって、

希子「別嬪さんやなあ。アンタどこのお嬢さん？」

美子と希子、家の中へ入っていく。

亜子、閉まった玄関扉を呆然とした顔で見ている。

美子の声「何ぼーっとしてんの。はよ入り」

○神田家・台所（夜）

亜子、美子、希子がテーブルを囲んで夕食を食べている。

希子「仏さんのご飯、下げてくれたかあ？」

美子「下げたで」

希子「ほうかあ」

希子、のんびりした動作で箸を口に運んでいる。

美子「ほんでアンタ、いつまでおるん？」

亜子「……まだ決めてない」

美子「30前の娘が無職の出戻りなんて恥ず

かしいわ」

亜子「言っとくけど私はまだ離婚してないから。あっちが泣きついてきたら慰謝料ぶんどってこっちから捨ててやるの」

美子「はいはい。それよりはよ仕事見つけて

や。ご近所さんの目もあるんやから」

亜子「大丈夫だよ。血はあらそわんねえうって納得してもらえるから」

美子「言うときけど私は7年持ったからな、結婚生活」

亜子「そう大差ないでしょ」

美子「4年と7年じゃ全然ちやうわ。四捨五入してみい。それになんやのそのけったいな方言は」

亜子「こつちが標準語なんですけど」

希子「なあ、仏さんのご飯、下げてくれたかあ？」

美子「下げたで」

希子「ほうかあ」

亜子、希子をちらっと見て、

亜子「……ねえ、おばあちゃん大丈夫なの？」

美子「見ての通りや」

亜子「見て分かんないから聞いてるんですけど」

美子「まあこんなモンやな、大体は。寝て食

べて5分に一回仏さんの心配して、を毎日や。るーちんるーちん」

亜子「包丁振り回すのもルーチンなの？」

美子「振り回してへんやろ。携えてただけや」

亜子「銃刀法違反って知ってる？」

美子「あんなあ、アンタはこの家帰って来た

ん10年ぶりやから分かんやろうけど、

我が家ではこれが日常やねん」

希子「なあ、仏さんの」

美子「下げたでくく」

亜子、ため息をつく。

○同・仏間（夜）

仏壇に神田三郎（62）の遺影が飾つてある。

仏花と一緒にばさばさになった仏飯が供えてある。その前に座っている亜子、

亜子「……下げないじゃん」

お鈴を叩き、

亜子「ただいま、おじいちゃん」

○同・亜子の部屋（夜→朝）

入ってきた亜子、部屋を見渡し、

亜子「……そのままだな」

亜子、鞆の中からプリザーブドフラワーの箱を取り出し、そっと机に置く。

× × ×

カーテンの隙間から朝日が漏れている。

ベッドで寝ている亜子、起きてたばこに火をつけようとする。

襖が開き、美子が顔を出して、

美子「禁煙」

ぱしっと襖が閉まる。

亜子、眉間に皺を寄せて襖をにらむ。

○服部商店・外

「服部商店」と書かれた看板がある店舗。店の前には喫煙スペースがある。

そこにスウェットに健康サンダル、サングラスをつけた亜子、やって来る。

周囲をちらちらと見渡した後、煙草に火を点ける。

商店の扉が開き、ビールケースを持った服部創太（28）が出てくる。

亜子、そーっと立ち去ろうとする。

創太、亜子に気が付き、

創太「……神田？」

亜子、振り向かない。

創太「神田亜子やろ、中3の時に同じ2組やった。俺、服部。服部創太」

亜子、あきらめたように振り返り、

亜子「神田じゃなくて今は葛谷。……まあもうすぐ神田に戻るけど」

創太「せわしいなあ」

亜子、ビールケースをじーつと見る。

創太、にっと笑って、

創太「冷えとるで」

○神社

階段に座り、亜子と創太がビールを飲

んでいる。

亜子「君が知らない男に毎晩笑顔を振りまくのが耐えられないって言うからキャバ辞めて専業主婦になったのに、たったの4年で浮気って何さまだよっ」

亜子、ごくごくとビールを飲む。

亜子「しかも相手は入院先の看護師だよ、看護師。弱ってる時に支えてくれたりって、私も毎日お見舞い行ってたんですけど?!」

創太「ナースかあ。夢あんなあ」

亜子、創太をじろつと睨む。

創太「冗談やって」

亜子「それでちょっと距離置こうってなったんだけど、お金も仕事も無いからおかげで出戻り。……もう帰ってくることは無いって思ってたのに」

亜子、ビール瓶の水滴をなでながら、

亜子「服部君、結婚なんてしなくて正解だよ。結婚して幸せだっって心の底から言ってる人、この世にいないからね」

創太「（笑って）んな極端な」

亜子「まじでそうなの。みんな自分が世界一不幸だってバレたくなって一生懸命幸せそうなフリしてるだけ。我が家を見てよ。3代揃ってみーんな失敗してるからね」

創太「（亜子の横顔を見て）……」

○服部商店・外

まで歩いてくる亜子と創太。

亜子「ごめんね、商品飲んじやって」

創太「（笑って）無職からは金取れんわ」

亜子、肩をすくめて歩き出す。

創太、亜子の後ろ姿をじっと見ている。

亜子、立ち止まっておもむろに振り返る。

創太、慌てて別の方向に視線をそらす。

亜子「ねえ、服部君のおばあさん」

創太「うちのばあちゃん？」

亜子「そう、お美津さん。もう亡くなってるよね？」

創太「ああ、俺が小4の頃に」

亜子「（ひとり言のように）時代は回ってるの
にね……」

創太「なんて？」

亜子「なんでもない。じゃね」

亜子、再び歩き出す。

○神田家・居間

希子、ぼーっとテレビを眺めている。

隣でせんべいを食べている美子、大蛇
が描かれた派手な紫のTシャツを着て
いる。

襖が開き、亜子が顔を出す。

美子「アンタなんやのその恰好。貧乏くさい」

亜子「昨日誰かさんに大仰やゝって言われた
から地味にしてるの」

美子「地味いうかあれや。センス。センスが
ないねんな、アンタ」

亜子、顔をしかめて、

亜子「そんな服着てる人に言われたくない」

亜子、音をたてて襖を閉める。

美子「この服めっちゃええやんなあ。金運あがりそうやし」

希子、無反応。

美子、閉じた襖に向かって、

美子「あと神社さんで昼間っからビール飲むんやめてやあゝ」

○同・階段

亜子、階段を登りながら、

亜子「……だから田舎って嫌」

○同・亜子の部屋

亜子、ベッドに座ってスマホを見ている。画面には亜子のSNSのページ。

葛谷啓一郎（35）との写真で埋め尽くされている。

その中に真っ白なバラの花束を持っている笑顔の亜子の写真があり、「ポーズされました！」の文字。

亜子、ベッドに倒れこむ。

亜子の視線の先にはテーブル上のブリザードフラワーの箱。

亜子の頬をゆっくり涙が伝う。

○同・二階廊下

亜子の部屋の前に美子が立っている。

部屋の中から亜子のすすり泣く声が聞こえる。

美子、襖に手をかける。

美子「……」

美子、襖を開けずに、そっと立ち去る。

○同・亜子の部屋（夕）

ベッドで寝ている亜子。

美子が襖を開け、

美子「ただ寝とんのよ。もう夜やで」

亜子、目をこすりながら起き上がる。

美子は派手な化粧にぴたっとしたカラーシートを着ている。

亜子「……今ってバブルだっけ？」

美子「これがセンスや。あんたも見習い。私
店行くからおばあちゃんの面倒見とって」

美子、階段を降りていく。

○同・仏間（夕）

希子が仏壇に向かって読経している。

亜子、希子の後ろに座り、経本を開く。

希子の読経、同じ箇所を行ったり来たり。
り。

それに合わせて、経本をめくる亜子の
手も行ったり来たり。

○同・台所（夜）

亜子と希子が夕食をとっている。

希子、目を瞑ってゆっくりと咀嚼して
いる。

亜子「ねえ、おばあちゃん」

希子「んー」

亜子「おじいちゃんのこと、今でも思い出

す？」

希子「んー」

亜子「今でも許せない？」

希子「んー」

亜子「……心底殺したい男のことを忘れるには、人生は短すぎるよね」

希子、目を瞑ったまま咀嚼し続けている。

○スナック美子・外観（夜）

入口に「スナック美子」の看板がある。

○同・中（夜）

松崎宏（５８）ら数人の客がカラオケをしている。

カウンターの美子、お酒を作っている。

歌い終わった松崎、美子の元へ来て、

松崎「亜子ちゃん帰ってきたんやって？」

美子「噂まわるん早いな」

松崎「こんな田舎町やでな。（親指をたてて）

あかんかったん？」

美子「みたいやなあ」

松崎「自分で会社やっとなる金持ちやったんやろ？ もったいないことしたなあ」

美子「なに言うてるの、松さん。どんだけお金があっても、女に愛を貢げない男は甲斐性なしの金食い虫と一緒にやで。さっさと捨てて正解や」

松崎「さすがママやなあ。言うことが違うわ」
美子「松さんも捨てられんよう気いつけや。」

あ、これ私や」

美子、マイクを取ってアン・ルイスの
「あゝ無情」を歌い始める。

○神田家・玄関（朝）

希子、車いすに乗っている。

亜子と美子、見送りに立っている。

ヘルパーの女性が車いすを押して、

ヘルパー「じゃあ行ってきますね。（幼児に話しかけるように）ほら、希子さんも、

行ってきますって」

と手を振るよう促すが、希子は無反応。

美子「お母ちゃん、子供扱いされるん嫌いやから」

ヘルパー「あ……すみません」

亜子「じゃあ祖母をよろしくお願いします」

× × ×

デイスerviスの車が発する。

亜子、家に入っていこうとする美子に、

亜子「もつと言い方考えたら？」

美子「なんの」

亜子「さっきの。ヘルパーさん気まずそうだったじゃん」

美子「ほんまのことやからしやーないやろ。

おばあちゃん意外とプライド高いねんもん」

亜子「だとしても口調とかさ、もつと優しく」

美子、欠伸をして、

美子「アンタ朝から元気有り余ってるなあ。

あ、そや、今夜からやから」

亜子「何が？」

美子「店。今夜から手伝いーよ」

亜子「店って……お母さんの？」

美子「そらそうやろ」

亜子「なんで私が」

美子「戻って来て一週間たつんやからそろそろ自分の食いぶくらい稼いでもらわんと」

亜子「……じゃあお金入れる」

美子「あかんあかん。昔の男の金なんか頼らんと自分で働き。丈夫な足があるんやから。（亜子の足を見て）やだアンタちよつ

と太ったんちゃうん？」

亜子「嫌だよ、知り合いばっかだもん」

美子「みんな喜ぶわう。アンタ昔からお酒作るんうまかったし」

亜子「あの頃私、中学生だったんですけど」

美子「懐かしいなあ」

亜子「労働基準法って知ってる？」

美子「時効や時効」

と家の中に入っていく。

亜子「それにドレスも持ってきてないし！」

美子、振り返って、

美子「私の貸したるから安心しやーて」

亜子「……お母さんのって」

○スナック美子・中（夜）

バブルっぽいカラースーツを着た亜子が、ムスっとした顔で座っている。

同じテーブルには美子、松崎、ホステスの中島敏江（５８）が座っている。

敏江「亜子ちゃんほんま久しぶりやなあ。綺麗になって」

松崎「最初分からなかったわ。昔はこーんな小さかったのに（と手で背丈を示す）」

美子「松さん、それやと幼稚園くらいやで」

松崎「やや、最近の幼稚園児は背え高いんや

なあ」

敏江「うちの孫がちょうどそれくらいやわ」

美子「なに水樹くんもうそんな大きいん？」

など身内話に花を咲かせる３人。

亜子、黙って自分で作った水割りをご

くごく飲む。

× × ×

美子と松崎、ステージでデュエットをしている。

亜子、カウンターで煙草を吸っている。
そこに敏江、やって来て、

敏江「そうしてるとほんま若い頃のママにそ
っくりやわあ」

亜子、露骨に嫌そうな顔。

敏江「（笑って）そんな顔せんと。このへん
では有名な美人さんやったんよ？」

敏江、マドラーをかき混ぜながら、

敏江「こっち10年ぶりくらい？ 変わらん
でしょ、田舎は」

亜子、熱唱する美子を見ながら、

亜子「……全く」

敏江「美子さん、亜子ちゃんが結婚した時ほ
んま喜んでったんよ。この店貸し切ってパ
ーティーしたり、自分で引き出物買って配
ったり」

亜子「そうですか」

敏江「なんで結婚式呼んだらんかったん？」

亜子「……」

敏江「お父さんの事、まだ許してないん？」

亜子「……」

美子「亜子」

美子、飲みすぎて顔色の悪い松崎の背中をさすっている。

美子「おしぼり持ってきて」

亜子、おしぼりを手に取り、

亜子「……許すとか許さないとか、そういう

次元じゃないんです、もう」

と立ち上がり、美子の元へ向かう。

亜子と美子、松崎を介抱している。

敏江、その様子を眺めながら、

敏江「ほんま似た者同士の母娘やなあ」

○服部商店・外へ店内

亜子、店前で煙草をふかしている。

そこへ創太、やって来て、

創太「昨日は盛り上がったんやって？」

亜子「……これだから田舎は」

創太「(笑って) ええやん、みんな神田が帰って来たんが嬉しいんやって」

亜子「すぐ出てってやるわよ、こんなところ」

と煙草の火を消し、もう一本吸おうとするが、空。

亜子「服部君、煙草ある？」

創太「アイコスなら」

亜子「裏切り者め」

創太「今時紙煙草吸つとるやつのが少ないやろ。店にならあるで」

と店内に入っていく。亜子も後に続く。

店内の棚には野菜や日用品が並ぶ。

亜子、駄菓子コーナーの前で立ち止まり、ヨーグルを手にする。

亜子「……」

○（亜子の回想）神田家・庭

亜子（6）、庭にいる。

家の中から美子の怒った声が聞こえる。

玄関の扉が開き、しょぼんとした神田

恭平（38）が出てくる。

亜子、恭平の元へ駆けていく。

恭平、ニカッと笑うと、

恭平「亜子ちゃん、ヨーグル食べに行こかあ」

○（戻って）服部商店・店内

創太、亜子を見て、

創太「ヨーグル欲しいん？」

亜子「……懐かしいなって」

創太「神田、昔よくそれ食うてたもんな」

亜子、創太を見る。

創太「（焦って）いや、神田だけじゃなくてみ

んな好きやったけども。うまいよな。俺な

んか今も週3で食ってるわ」

亜子「……好きすぎでしょ」

二人、煙草を吸いに外へ出て行く。

○神田家・亜子の部屋（夜）

入ってきた亜子、本棚から古いアルバムを取り出す。

ページをめくっていくが、亜子、美子、希子が写っている写真のみ。

中には意図的に恭平の姿が切り取られた写真もある。

亜子「……」

○同・台所（朝）

亜子、美子、希子が朝食を食べている。

希子「なあ、仏さんのご飯、下げてくれたかあ？」

美子「さっき上げたばっかやでお母ちゃん」
希子「ほうかあ」

亜子、美子の様子を伺っている。

美子「なんやねんさっきからチラチラと」

亜子「……別に」

美子「エリカ様か」

亜子「古」

美子「アンタ似てるやんあの子に。ツンツン

してるところとかそっくりやわ」

亜子「誰のせいだと……」

美子「ほんでなんやねん」

亜子「いや、ちょっと思い出してさ。……お

父さんの事」

美子「アンの？」

亜子「他にいないでしょ」

美子「まあ生物学上は一応父親か」

亜子「お父さんと連絡って取ってる？」

美子「ないない。貧乏神つくわ。あんな金食い虫のことなんか思い出すのやめとき。時間勿体ない」

亜子、ムツとして、

亜子「そんな言い方やめてよ」

美子「ホンマのことなんやからしやーないやん。しょーもない男やもん」

亜子、箸を置くと、

亜子「……ごちそうさま」

と立ち上がる。

美子「皿洗いアンの当番やでー」

亜子「あとでやるから置いといて」

亜子、出ていく。

美子「いつまで反抗期なんやろなあ」

希子「仏さんのご飯、下げてくれたかあ？」

美子「下げたで、やなくて、上げたで」

と納豆ご飯をかきこむ。

○お盆の田舎町の風景（夕）

各家の玄関先に門提灯が灯っている。

○神田家・仏間（夕）

亜子、入ってくる。

希子が仏壇の前に座っている。

希子「何言うてんの。アンタはほんま調子が

ええなあ」

と一人で楽しそうに話している。

亜子「……おばあちゃん、行こっか」

希子、振り返って、笑顔で頷く。

○道路（夕）

亜子、希子に乗せた車いすを押しながら歩いている。

並んで歩く美子は鬼灯を抱えている。

○墓地（夕）

坊主が観音様の前で経を唱えており、各墓の前で住民たちが目を瞑って手を合わせている。

亜子と美子も「神田家」の墓の前で参っている。

亜子、ちらつと目を開け、希子を見る。

希子、目を見開いて墓を見上げている。

亜子「……」

亜子、再び目を閉じる。

○神田家・庭（夜）

割り箸を刺されたきゅうりとナスが地面に置かれている。

亜子と希子、縁側に座ってスイカを食べている。

亜子、スイカを上手く食べられず、手
や口元が汁で汚れる。

希子「(はきはきした口調で) 亜子ちゃんべ
たべたやないの。これで拭きんさい」

と亜子に手ぬぐいを渡す。

亜子「……ありがとう」

希子「亜子ちゃんは昔からあわてんぼうさん
なんやから」

と笑う。

亜子「おばあちゃん、今日なんか調子いい？」

希子「ほうかあ？ いつもと変わらんで」

美子、やって来て、

美子「はい、お母ちゃん」

と持っている手持ち花火を差し出す。

希子「あんがとさん」

と受け取り、選び始める。

亜子「花火？」

美子「送り火の代わりや。こっちのが準備楽
やし綺麗やしええやろ」

希子「これにするわ」

と線香花火を手にする。

美子「（亜子に）アンタつけたって」

亜子、ライターを取り出し、希子の線香花火に火を点ける。

希子、真剣な顔で火花を見つめている。
線香花火の火の玉が落ちて、消える。

希子、ゆっくり息を吐き、

希子「お父ちゃん、帰ってったわ」

美子「なによりやな」

希子「……寝よかなあ」

美子「そやな」

希子、ゆっくり立ち上がると、亜子に、

希子「ほなおやすみんさい」

亜子「おやすみ」

美子、希子を支えて連れていく。

× × ×

亜子と美子、縁側に座って花火をしている。
いる。

亜子「おばあちゃん、おじいちゃんのこと本当に好きだったんだね」

美子「好きいうかもう執念やな、あれは」

亜子「おじいちゃん浮気ばっかしてたのに、

結局最期まで別れなかったしね」

美子「お父ちゃんが逃げ出そうとしたら、浮気相手んとこまで追っかけてって引っ張って連れ戻してたからな」

亜子の線香花火の火玉が地面に落ちて消える。

亜子「あ、落ちた」

美子、亜子の花火を取って、足元の水が張ったバケツに落とす。

美子「最後までちゃんと消さんと。延焼したら手遅れやでな」

亜子「……うん」

美子、自分の花火をバケツに落として、

美子「スイカもう無いな。アンタ食べる？」

亜子「もらう」

美子「ほな半分切ろか」

と立ち上がり、台所へ向かう。

亜子、別の花火に火を点け、火花をじ

つと見つめる。

○服部商店・玄関（夜）

創太、ドアを開ける。

玄関の前に立っている亜子、

亜子「今夜は私の奢り」

と缶ビールを掲げる。

○道路（夜）

田んぼ道を亜子と創太が歩いている。

二人ともビールを飲んでいる。

創太「ほんでどうしたん？　こんな時間に」

亜子「いや……特に何かあるわけじゃないん

だけど、飲みたくて」

創太「ほんまのんべえやな」

と笑う。

創太「どうなん？　お袋さんとは」

亜子「どうって、別に変わりないよ」

創太「進展してるやん」

亜子「どこが」

創太「帰って来たばかりの神田におんなじ質問したらお袋さんの愚痴めちやくちや言うてたやろうから。このまま仲直りできるんちゃうん？」

亜子「それは無い」

創太「なんでよ」

亜子「……私の記憶の中のお父さんって、いつもお母さんに怒鳴られてたんだ。なのに私の前ではずっとニコニコしてて、すごく優しかった」

創太「そうなんや」

亜子「お父さんが出てった日……追い出された日、お母さんなんて言ったと思う？

『清々した。あんたもはよ寝て忘れや』つて。その夜、お母さんほんとに気持ちよさそうに寝てたんだよね。隣の私は一睡もできなかつたのに」

創太「……」

亜子「そういう人なの。平気で愛した人捨てられるような。……私の気持ちなんて分かる

んないよ、一生」

創太「……そっか」

創太、ビールを飲む。

亜子「……服部くんって、優しいよね」

創太「？ 普通やで」

亜子「優しいよ。私の愚痴にも付き合ってくれるし、意見とかも絶対否定しないし」

創太「それは神田がおもしろいからやって。おらんもん、こんなヤツ」

亜子「……悪口？」

創太「（笑って）ちやうちやう。それに、俺のは優しさとはちよつとちやうと思う」

亜子「どういうこと？」

創太「ほんまに優しい人は、100%相手の事思っって行動するから。例え相手に嫌われでも。神田のお袋さんもそうやないんかな
っって俺は思うけど」

亜子「……」

創太「そういう人がおるのは幸せなことやで」

亜子「……服部君は違うの？」

創太「俺は……神田に嫌われたくないって思
ってるところあるから」

創太、亜子をじつと見つめる。

立ち止まり、見つめ合う亜子と創太。

を車のライトが照らす。

軽自動車が軽くクラクションを鳴らし、

二人の横を通り過ぎていく。

亜子「び、つくりしたあ」

創太「健太郎んとこのじいちゃんやったな」

亜子「え、もう80とかでしょ？　まだ運転
してるんだ」

創太「俺何度かひかれかけたわ」

亜子「だめなやつじゃん」

創太「……」

亜子「……帰ろっか」

創太「……そやな」

二人、来た道に戻っていく。

○神田家・玄関（夜）

亜子、帰ってくる。

待っていた美子、

美子「何時やと思ってるの。日またいでんで」

亜子「……もう大人なんだからほっといてよ」

と階段へ向かう。

美子「一回失敗したんやからしばらくやめとき」

亜子「（振り返って）……なにが」

美子「創太くんと会ってたんやろ、健太郎君
ちのじいちゃんがわざわざ言いに来たで。

出戻りしてもう次の男探してるんかって言
われたわ。あのお節介ジジイ」

亜子「服部君はただの友達。ただお酒飲んで
ただけ」

美子「あの子の気持ち気づいてるやろ？ 昔
っからアンタにホの字やったもんな」

亜子「……」

美子「楽な方逃げてもまた繰り返すだけやで」

亜子「……お母さんには分かんないよ」

美子「なんよ」

亜子「……お母さんといるとほんと疲れる。」

消耗する。みんながお母さんみたいに強いわけじゃないんだよ」

と階段を上っていく。

美子「（亜子の背中に）ちよつと！ まだ話終わってへんで」

亜子、自室の扉を音を立てて閉める。

立ち尽くす美子の背中。

○スナック美子・中（夜）

亜子、カウンターで黙々と氷を削っている。

美子、テーブル席に座って同じく黙々と氷を削っている。

美子の隣に座っている敏江と松崎、亜子と美子を見比べて、

敏江「また喧嘩したん？」

美子「してへん。あの子が拗ねてるだけや」

松崎「それにしてもママも機嫌悪いやん」

美子「何言うてるの松さん。私はバリバリ平常運転や」

と更に力を込めて氷を削る。

○同・外（夜）

美子と敏江、帰っていく松崎を見送っている。

敏江「ほんで、どうしたん？」

美子「何がよ」

敏江「亜子ちゃんと。ママ、私に隠し事は無しやで」

美子「……あの子、私といると消耗するんやって。疲れるんやって」

敏江「亜子ちゃんが言うたん？」

美子、頷く。

敏江「それはキツツいなあ。ママも亜子ちゃんも憎まれ口は饒舌やのに、ほんまにもてること伝えるんは下手くそやから」

美子「私はいつも本音しか話してへんで」

敏江「でも父親の事は言うてへんのやろ？」

美子「どの？」

敏江「一人しかおらんやろ。恭平さんや」

美子「ああ。生物学上の」

敏江「ちゃんと言うた方がええよ。恭平さん
追い出した理由。ママが亜子ちゃんのため
に積み立ててたお金、パチンコで溶かして
もうたんやろ？ ギャンブルやめるゆうん
も口先だけやったし。理由話したら分かっ
てくれるて」

美子「ええんよ、そんなしよーもないこと話
さんでも。あの子は父親っ子やったし」

敏江「でもそれやと亜子ちゃんこの先も誤解
したまんまやで？」

美子「あの子がちゃんと幸せになれるなら、
私はいくらでも嫌われ者になったるわ。私
が一番大切なんは亜子とお母ちゃんなんや
から」

敏江「なんでそれを亜子ちゃんに言わんかな
あ」

美子「そんな言わんでも分かるやろ。母娘
なんやもん、幸せ願うんは当たり前や」

敏江「母娘やからこそ言葉にしんと伝わらん

こともあると思うで？ 特にママと亜子ちゃん
「は」

美子「……」

○神田家・玄関（朝）

亜子、デイスサービスの車が出発したの
を見届けて、家の中に戻っていく。

ラインの着信音。

スマホを見ると、啓一郎から「亜子ちゃん
の地元に来てます。これから会え
ませんか？」とメッセージ。

× × ×

着替えた亜子、慌てた様子で階段を降
りてくる。

居間の前で立ち止まり、そつと襖を開
ける。中で美子、寝ている。

亜子、ゆっくり襖を閉める。

寝ている美子、目を開ける。

○無人駅前

亜子、走ってくる。

駅前で啓一郎が立っているのを見つけ、
スマホの画面を見て前髪を整えると、
深呼吸をして近づく。

亜子に気が付いた啓一郎、笑顔で手を
挙げる。

亜子、平静を装って、

亜子「……どうも」

○喫茶店・中

亜子と啓一郎、向き合って座っている。

啓一郎「亜子ちゃんの地元初めて来たけど良
いとこだね」

亜子「……」

啓一郎「電車乗るときスイカ使えなくて焦っ
たよ。切符って風情があっていいよねえ」

亜子「……なんの用？」

啓一郎「あ、そうだね。急に押しかけた
りしてごめんね」

亜子「……別にいいけど」

啓一郎「ほら、僕たちあんな別れ方しちゃつてさ。別々に過ごしている間、亜子ちゃんに本当にひどいことしたなっつと後悔してて」

亜子「……」

啓一郎「だから謝りにきたんだ。本当にごめんね、亜子ちゃん（と頭を下げる）」

亜子「いいよ。……もう怒ってないから」

啓一郎「……本当？」

亜子「うん。あんたのことなんか今日会うまでもう忘れてたし」

啓一郎「（笑って）亜子ちゃんらしいね。懐かしいな、この感じ。そういうところに惚れたんだった。……あのさ、僕たちまだ正式に離婚していないよね？」

亜子「……そうだね」

啓一郎「それでさ」

啓一郎、鞆から離婚届を出して、

啓一郎「こういうのは急いだほうが良いと思っ
って」

亜子「……え？」

啓一郎「いや、彼女がさ、出来ちゃって。ほ
ら、赤ちゃん。戸籍の関係もあるから、僕
たちのこと早く片付けた方が良くはなつて」

亜子「……片付け」

啓一郎「ごめん、言い方悪かったね。でもほ
ら、亜子ちゃんも僕とのことなんか早く終
わらせたいでしょ？」

亜子「……」

啓一郎「彼女が不安がつてて。亜子ちゃん
と違って一人では生きてけない子だからさ。
それで」

啓一郎、話し続けるが、亜子の耳には
雑音が聞こえるだけ。

と、テーブルを叩く音。

亜子、はっとして顔を上げる。

美子が立っている。

美子「（啓一郎を見て）おいクズ。金玉引つ
こ抜かれたくなかったらさっさと去ね」

○同・外

美子と亜子、出てくる。

美子「ほな帰るかあ」

亜子「……なんでここ」

美子「アンタのことならなんでもお見通しや」

亜子「……」

美子「にしてもほんまろくでもない男やな、

アンタの旦那。あ、元旦那か」

亜子「……」

美子「さっさと捨てて正解や、あんなん。あ
んたももつと言ったれば良かったのに黙り
こくって」

亜子「……なんで勝手なことするん？」

美子、亜子を見る。

亜子「いっつも……いっつもやん！ 私の気
持ちなんかお構いなしで心に土足で踏み込
んできて好き放題荒らして」

亜子、涙があふれてくる。

亜子「分かんやろうね、お父さんのことあ
んな簡単に切り捨てられるお母さんには！

なんとも思っていないんやろ？ 私の事もお父さんのことも！ もうほんま嫌いや。：

：出てったのがお母さんだったら良かったのに！」

と走り出す。

追いかけようとする美子。

と、美子のスマホが鳴る。

美子「なんやねんこんな時に」

電話に出た美子の顔、強張る。

○服部商店・前

創太、品出しをしている。

そこに亜子、やってくる。

創太「どうしたん神田、その顔」

亜子、創太に抱きつく。

創太、戸惑いながらも亜子を抱きしめる。

○同・創太の部屋（夕）

キャミソール姿の亜子、窓の外を見な

がらヨーグルを食べている。

ベッドでは創太が半裸で寝ている。

亜子、ヨーグルを見つめて、

亜子「……こんな味やったっけ」

○（亜子の回想）パチンコ屋・前

幼い亜子、ヨーグルを食べている。

パチンコ屋の入口を眺めているが、誰も出て来ない。

そこに美子（31）、やって来て、

美子「おったおった。帰るか」

亜子、泣きそうな顔で美子の手を取る。

二人、並んで帰っていく。

○（戻って）服部商店・外（夕）

亜子、出てくる。

亜子のスマホに敏江からの着信。

亜子「（電話に出て）……はい」

敏江の声「亜子ちゃん！？ 今すぐ帰ってきて、

て、希子さんが……」

○神田家・外（夕）

亜子、走って来る。

家の間では美子がヘルパーの女性に

詰め寄り、

美子「なんで家の中まで見送らんのよ！」

ヘルパー「申し訳ありません！ 電話で2、

3分目を離したただけなんです……まさかいなくなるなんて……」

美子「目を離した！？ なにいい加減なことしてんねんアンタ！」

敏江、美子を押さえて、

敏江「ママ、気持ちちは分かるけど落ち着いて」

美子「お母ちゃんになんかあったらアンタ絶

対許さんからな！ 覚えとき！」

亜子、美子の元へ走ってきて、

亜子「おばあちゃんは？！」

美子「いなくなってもう1時間や。（ヘルパ

ーをキツと睨んで）この人が彼氏と電話し
とる間にな！」

亜子「警察は？」

美子「もう呼んだ」

敏江「近所の人にも応援頼んでくるわ」

敏江、走っていく。

亜子「うちらも探しに行こ」

と走り出そうとする。

が、美子は立ち尽くしたまま。

亜子「お母さん？」

美子、固まって動けない。

亜子「お母さん！」

美子、ハッとして顔を上げる。

亜子「おばあちゃん待ってるよ。行こう」

美子、頷く。

亜子と美子、走り始める。

○町内（夕）

亜子、走りながら、

亜子「おばあちゃん！」

× × ×

美子、家と家の間の路地を一つ一つ覗

きながら、

美子「お母ちゃんどこー！？」

○神社（夕）

亜子、走って境内にやってくる。

本殿をぐるっと一周して確認すると、

また走りだし出て行く。

○墓地（夕）

神田家の墓石の前に息の荒い亜子が立

っている。

亜子「おじいちゃん。おばあちゃんどこにいるん？」

○神田家・外（夕）

美子と敏江、家の前で警察と話している。そこに亜子、走って来る。

亜子「おった！？」

美子、首を横に振る。

亜子「じゃあもつと範囲広げないと」

美子、その場でしゃがみ込み、

美子「……お母ちゃん、帰ってこんかったら
どうしよう」

と子供のように泣きはじめる。

亜子、美子の両肩を掴み、

亜子「お母さん、しっかりせんと！ おばあ
ちゃんうちらが迎えに来るの待つとるんや
から！ ね？」

美子、泣きながら頷く。

敏江、何かに気が付いた様子で、

敏江「ねえ、」

亜子「ほな私小学校の方見てくるで」

敏江「ねえねえ！」

亜子と美子、敏江を見る。

敏江「……これ誰の声？」

全員、耳を澄ます。

読経の声が家の中から聞こえる。

亜子と美子、顔を見合わせ、慌てて家
の中に駆け込んだ行く。

○同・仏間（夕）

亜子と美子、走り込んでくる。

希子、仏壇の前に座り読経している。

希子の横には包丁がおいてある。

美子、希子の姿を見てほっとして脱力する。

亜子、希子に駆け寄り、

亜子「もーおばあちゃん！　どこ行ってたんだよ。ほんまに心配したんやからな」

希子、亜子にはきはきした口調で、

希子「あんな、お父ちゃん、もう死んでたわ」

希子、仏壇の三郎の遺影に視線を移し、

希子「刺し損ねてもうたなあ。しまったなあ。

なあ、お父ちゃん」

希子、愛しそうに遺影を見つめる。

亜子、ため息をつき、

亜子「なんやねんそれ」

○同・亜子の部屋（夜）

亜子と美子、窓際でヨーグルを食べて

いる。

美子「今日のお母ちゃんにはほんま参ったな

あ

亜子「ね。でもなんもなくて良かったわ」

美子、亜子をちらっと見て、

美子「……ごめんな、喫茶店の。やりすぎた

わ

亜子、驚いた顔で美子を見て、

亜子「……お母さんが謝った？」

美子「なんやねんその反応」

亜子「だって初めてやもん、お母さんが謝る

なんて。え、明日雪ちやう？」

と窓の外を見る。

美子「失礼な子やな」

亜子「もういいよ。お母さんの言う通りとん

だドクズやもん、アイツ。それに……私の

方こそごめん」

美子「なんでアンタが謝るんよ」

亜子「お母さんのこと嫌いやって思ったこと

は何度もあるけど、いなくなったらいい

なんて思ったことは一回もないから」

美子「……なんやこれ。はずかしいな」

亜子「いやほんまそれ」

美子、ヨーグルを一口食べて、

美子「にしてもこれあつまいな」

亜子「ね、甘すぎ」

美子「？ アンタ好きやったやろ、昔から」

亜子「んーまあ大人になるとね、変わるよね、

味覚とか色々」

美子「私にとってはアンタはいつまでも手の

かかる子供やわ」

亜子「はいはい（と笑う）。……おばあちゃん、

今日おじいちゃんに会えたんかな」

美子「どうやろなあ。まあ会えるまで包丁携

え続けるやろなあ」

亜子「けつたいやなあ、愛のあれこれ言うん

わ」

空を眺め続ける二人の後ろ姿。

○ゴミ捨て場（朝）

亜子、ビニール袋を置いて立ち去る。
袋の中にはブリザーブドフラワーの箱
が入っている。

○神社

亜子、創太に向かって頭を下げて、

亜子「ごめんなさい」

創太「……俺はそれでも良いって言ったら？」

亜子、顔を上げて、

亜子「服部君には……正直、惹かれてる」

創太「じゃあ」

亜子「でも、このまま付き合ったらまた同じ
失敗繰り返そうで。まずは自分のことち
やんとしたいんよ。好きな人に、素直に好
きって言えるように」

創太「……今のやばい。惚れ直した」

亜子「（笑って）なんでやねん」

創太「待ってるのは良い？」

亜子「……いつになるか分からんよ？」

創太「ええよ、全然。俺の片思い歴何年やと

思っ て ん ね ん」

亜子と創太、顔を見合わせて笑う。

○神田家・台所

亜子、美子、希子が食事をとっている。

希子「なあ、仏さんのご飯、下げてくれたか

あ？」

美子「下げたで」

希子「ほんまかあ？」

美子「ほんまほんま」

希子「ほんまかあ？」

亜子「ほんまほんま」

希子「ほうかほうか」

食事を続ける3人。

○タイトル「神田家の男運と愛のあれこれ」

（了）